

蠅螂の斧 (とうろうのおの)

社会システム変化への介入 part 1

1990年 京都児童相談所 内外事情 第六回

団 士郎

仕事場D・A・N/立命館大学大学院

児童相談所で働いていた頃、誰かに言われたことがある。「団さんは、相談がなくても児童相談所があれば、十分楽しめますよね」。おかしな言い方が本当にそうだった。相談よりも児童相談所が好きだった。業務集団として、どんなことまで出来るだろうかを考えているのが楽しくて仕方なかった。それはその時に始まったことではなく、基本的に昔からそうだった。臨床現場（医療・保健・福祉・教育）で仕事をしている人の多くは、一番大事なのは来談者、利用者だと思っているのだろう。しかし私は、その仕事に従事する集団が一番なのだった。人間関係などではなく、業務が発展、深化してゆくメカニズムが好きなのだ。そこに何かを付け加えていくのが大好きだった。

何が起きるか分からないけれども常に何か起きる。そしてその多くは初めて起きたことではない。これが人の世の原則である。だからまずは歴史に学ぶこと。そしてもう一つは、自分自身その流れの中にいるのだから、そこで受ける生体としての感覚（予感）に従うことだ。

1993年、不本意ながら異動した知的障害者更生相談所(当時、精更相)は、とても限られた業務だけを負託された機関だった。療育手帳の更新と施設入所判定書作りが主な業務。非常勤職も多く、そのスケジュール管理と予約台帳の管理が私の仕事だった。それをしながら、公的な機関にもたらされる仕事は、どのようにこの世界に登場してくるのが気になった。まだ着手していないことで、今、ここでしておくべき事の存在予感が消せなかった。

その頃、京都造形芸術大学に在職していた野田正彰氏が戦後処理問題に焦点を当てた授業をしていた。ナチスの子ども達とイスラエルの人々との和解をテーマにした話や、高齢化した中国帰還兵の加害記憶の語りへの関心などが焦点だった。氏の著作「喪の途上にて」(岩波書店刊)は、日航ジャンボ機の墜落事故被害者家族のその後をインタビューして書かれたもので、この頃から日本社会では心のケアや喪の仕事のことなどを喧伝し始めていた。

行政機関にとって、こういう役割の準備はどのようにしておかれなければならないのか。それを知的障害者更生相談所の場から考えると、どんなデザインになるのだろうと考え、そのための学びをと思い立った。管理職に話して、業務日の昼間、野田氏の講義聴講をと打診してみたが、「言ってることが分からない」と却下された。仕方ないので、毎週時間休を取って半期、受講に大学に通った。

この翌年、1月に阪神・淡路大震災が起きた。児童相談所には支援体制協議や、派遣スタッフの分担が下りてきていた。しかし、知的障害者更生相談所にはなんのオファーもなかった。児相併設の府県も多く、単独設置しているところの少ない出先機関など、誰の眼中にもなかった。在宅の知的障害者が避難指示の理解不十分や、臨機応変な対応からも外れて、ポツンと自宅に取り残されていたことは、後から明らかになったりしていた。

これは二十一年前の京都府京都児童相談所での日々を、相談判定課長職にあった筆者が、当時の日記(ハコ部分)を元に再考したものです。明治・大正や終戦直後と比べるのではなく、ほんの二昔前の仕事の振り返り。そこから見えてくるものは・・・

1990年6月

6/1 FRI S 高校定時制の教員研修で話した。少人数が口の字型に並べたテーブル座席に座っているもので、こちらの視線の方向が定まらず、ひどく疲れた。それにザワザワしていて愉快ではなかった。

ディスカッションするわけではないのに、口の字型に並べた会議机で話をさせられることがあった。後年は、自分が話しやすいレイアウトに変更してもらうよう言えるようになったが、前にはこんな事がたまにあった。

関係機関が一堂に会した協議会などで、大きな口の字型の中央の空洞に、みんなで愚にもつかない意見を吐き出し合う図が今も目に浮かぶ。形も大切だ。

そして教員職の人たちの、受講態度作りの下手さを何度も嘆いた。自分の授業で、そういう態度の生徒が居たら、気分が悪いだろうと思うのだが、いつも生徒たちにやられている仕返しのつもりかもしれないなんて思った。

6/2 SAT 児相研セミナー現地実行委員会。いろいろプランや全体像について意見を出し合う。新しいことがやれそうな気配もある。

夜、中国の漫画展の打ち上げがあったが、明日は施設運動会の応援で出勤のため、気持ちが乗らないので欠席。

児相研セミナー(現・「児童問題研修セミナー」。発足時点は「児童相談所問題研究セミナー」。途中で名称変更したけれど、今あらためて、「児童相談所問題研究セミナー」に戻すのが、今の児童福祉分野を多面的に再考することになるのではないのかと思う。児童虐待相談所について研究する気は、私には湧いてこない。)の開催を京都で引き受けていた。

こういう全国大会を引き受けると、大抵一年がかりの事務局仕事になった。おろん、それで盛り上がる面があることも否定しない。大きなイベントに向かって一致団結するパターンはそこここに存在する。しかし私はこういう一般化に不同意だった。こんな大会くらい、軽々とやっしまえばいいと思っていた。

そこで、岡田隆介さん(当時、広島市児相長・児童精神科医)と始めた「児童相談所とその近接領域における家族療法・家族支援の実際・勉強会」では、現地準備は最低限でやれるノウハウの開発を考えた。

当日配布の勉強会冊子や、終了後のレポート冊子があつという間に発行出来る方法も考えた。(こういう報告集って、終了後一年くらい経って出るのが通例だった。そして誰も読まない)。今なら、ネット環境が整ったからもっと簡略化の工夫の余地がある。この発想の延長線上に、「対人援助学マガジン」の発行もある。

20年前、「今こそ中国で！」と勧められた漫画展は、終始うさんくさい話で、委託した世話人の言うことがコロコロ変わっていった。最初は南京の博物館でやるとか言っていたのだが、結局、専門学校の体育館のようなところに展示したらしい。

ただし、「マンガ」に関する世界の大きな潮流から、本家の日本は終始立ち後れ気味だった。この後、10年ほど経った頃、我々のマンガグループ「ぼむ」は、中国の新設芸術系大学で「日本漫画・アニメ」の講座を引き受けることになる。そして複数のスタッフが数ヶ月滞在して集中講義をしたりした。私は韓国のマンガを履修する高校生の集まりで、講演する機会を与えられたりした。

「マンガ」に対して一番保守的で、見下した態度をとり続けているのが我が国だ。「国立の漫画喫茶など作ってどうする！」と誰かの政権の新企画を叩きつぶしたのも、マンガ好きのほぼ日本国民だった。その引き金が、マスメディアの内在する冷笑的エリート主義だったと思う。日本マンガを馬鹿に出来ると思っているあなたは何者なのか？世界のあらゆる創造活動に、日本マンガが及ぼした影響を一番分かっていないのが中高年の日本人かもしれない。

6/3 児童福祉施設の連合運動会。決勝係りで参加。日差しの中で一日いることなどほとんどないもので、すっかり日焼けしてしまった。腕まくりをしていたところは段がついて、縞模様焼けの腕になってしまった。全く何ということだ。

こういう役回りは、引き受けないことが多かったから、珍しいことだ。我が子の運動会や学校行事にもほとんど行ったことがない。そういう役割を楽しんでできる人が

羨ましいと思うが、できないことは仕方がないと思っていた。

そんな場に立っていると、突然自分がモノになってしまったような気になってしまう（自意識過剰だ）。ゴチャゴチャ思わず、必要ならば引き受けられるようになったのは、やっこの頃からだった。

同じ頃、暮らし始めた新興住宅の町内会でも、広報紙担当を引き受け、火の用心の夜回りにも出て、数人のご近所さんと居住区周辺を、拍子木を打ちながら巡回した。

あほらしいなあとも思いながら、こういう楽しみもあるのかと思い、志ん朝の落語「二番煎じ」のことを思い出していた。

6/4 重症児施設から知的障害児施設に移った子どもが、てんかんの発作がひどくなって・・・という一件で動いている。M学園の管理体制そのものが問われるような、後ろめたい失敗が隠蔽されかけたりした。事実解明に担当児童福祉司はよく動いている。

授業管理をする看護職スタッフがいて、定量与えているはずの錠剤の数に食い違いが起きていた。それを、うっかりしていたという理由で、引き継ぎスタッフに伝えなかった。引き継いだスタッフは、残っているものだけを与えて済ませていて、それが次にも引き継がれたらしい。その結果、発作が起き、原因究明の結果、事実が明らかになった。

当時、とんでもない話だと憤慨したが、こういう杜撰なことは、あちこちで今も引き継ぎ起きている。2011年に事件になったユッケ食中毒の事件も、後で調査すると、とんでもない無責任と杜撰さが発見されたりした。以前もあった食肉の偽装事件や不当表示など、いろんな事を、皆さんも

忘れてはいないだろう。

今回の原発事故のずっと前、たしか放射能汚染水を手作業のバケツでくみ出していたニュースがあったことも覚えている。

つまり人間は、お互いの信頼関係なんて口先言葉で済ませているとこうなってしまうらしい。個人の人間性なんて正体不明な話でごまかさないうで、そういう実態を形成しやすい社会システムだと考えるほうが、改良点はいくつも発見できる。

6/5 ひよんなことで、K福祉司と夜十時半頃まで話しこんだ。見破る目と見守る目。好きになることと、好きなことを伝えるための力、そんな話をする。「好いてくれる人を好きになる、それも相手よりずっと少なく」という愛情関係で生きてると語る彼女の話の聞いていて、どんな成育歴なのだろうと思う。

そういえば以前、同僚だったことのある体に障害を持つHさんが、似た感じのことを言っていたのを思い出した。

他人との関係を切り結ぶ作法として、どの程度の自己開示と、相手の自分への意思表示や自己開示度を求めるかは、人それぞれ流儀があるようだ。

相手がどうだろうと私は…と語れる人は強い。逆に、相手が自分をどう思っているかを確認した上で、自分の表明態度を調整するというのは弱い。多くはこの間にグラデーションで存在する。

この態度形成の背景は、親子関係、家族関係に起因するモノが大きいのだろう。そしてこういう感覚は、私生活を支配するだけではなく、対人援助サービスの現場では、しばしば業務関係にも直結してしまう。

過剰な思い入れや、逆の手厳しい批判など、どうしてそこまで…と思わされる仕事

の報告を目にする。ヒューマンサービスの現場にいる者は、自分のことを知っておかなければならないなあと改めて思った。

6/8 人事異動の内示があつて、宇治児相の課長が代わる。後任は本庁の福祉係長だという。児相再編時の、「相談判定課長人事は臨床経験者の中で」という約束は早くも、あの時だけのリップサービスだったことになってしまった。

そもそもあの時の人事担当者の見解が、たいした信念があつたわけでもないから、その時々でコロコロ変わるのである。私にもそれほど確信があつたわけではないが、懸念して予め手を打っておくべきだ、と判定員連中に言っていたことが早くも現実になった。

心理職の重要性など、人事に携わる役人には関係ない。組織の評価担当者さえ関心はないかもしれない。

宇治(中央)児相の新課長が一般事務系職ということは、今後いろいろな影響を及ぼすだろう。本庁係長だった新任のSさんは何もしないでいる人ではない。

しかし何にしても人事異動期は愉快じゃない。私にとっては今のポジションの居心地はベストだと思うのだが、他の人にとっては、私がいままで上は詰まっていることになる。京都府への貢献度は高い自分だと思っているが、組織の上の評価までは何ともできん。

20年後の今読んでみて、熱く語っているなあとと思う。やはり人事はストレスだったのだ。思い出しても、一番イライラしたことだった。

組織を離れて独立をして、仕事を始めてから、世の中の評価は案外公平だと実感し続けている。

私だけへの格別な何かを要望していたのではない。妥当な評価のできる人を求めている。(これを甘い！と言って済ませられる人に、組織論を語る資格はない。)

この時の異動は、今考えても私が宇治(中央)児相の相談判定課長になるのが順当だったろう。

無論、何人かは公平だと思える上司、幹部もいた。しかし京都府には二十五年も在職したのに、結果的には組織貢献的だとも、人材育成が上手だとも思ってもらえていなかったようだ。そしてこの時の人事は、今になると分かるのだが、この時点だけのことにはならなかった。私が50歳で退職し、その後も順次、退職が続く引き金になっていたように思う。

本庁から来たSさんと私は上手な棲み分けをしていたと思う。しかし彼を出先公所の中間管理職に出した本庁は、再び呼び戻すことに消極的だった。

そのため、元々児童相談とは何の縁もなかった行政職の課長が、歴代の相談判定課長の中で一番長く居座ることになった。

ポストが空かなければ玉突きもない。私は中央児相の課長になることはなく、他公所の所長補佐職で異動になった。そして児童相談所との縁が切れて、五年後に退職した。

もしあのとき、宇治児相の相談判定課長で異動していたら、五年後の退職決断はなかっただろう。それが私の人生にどうであったかは、選択されなかった方の人生評価に意味がないように、考えても詮ないことである。しかし、もしそうだったら京都府は、今とは少し違っていただろうと思う。

私たちは、今していることが、未来の何に繋がっているのか、想像力を欠きすぎて

いる。予言者にはなれないのだから、せめてその時点で、精一杯の英知で目前の課題に当たっておきたいものだ。

6/09 第二土曜日。すっかり週休二日のペースが身に付いた。だから先週のように日曜日のない14日間を過ごす、途端に体調を崩してしまった。体力を自慢する歳ではないことをもっと具体的に自覚すること。

これを書いたのは四十三歳の時である。サラリーマンだったのだなあとと思う。去年、六十三歳の私は、最長四十日連続でオフ日なかった。でも、それがストレスや体調不良の原因にはならなかった。自分で計画を立てて、決めて働いているのは、忙しくはあっても、それだけのことだ。

仕事において、させられている感がないのは非常に重要な要素だと思う。自分で決めて、自分で実行する仕事は楽しい。

6/14 THU 複雑な家庭事情を抱えた中学三年の女子の処遇でいろいろ考えている。家出中を保護され、事情があつてここに来た子である。夜は宿直担当だったので、その子といろいろ話した。発達と土地と血縁者とまわりの他人、それに自立の時期と甘えへのこだわり、そんなことが渦巻く。限られた選択肢の中から、うまくいきそうな一つを選んでやらなくてはならない。



児童相談の仕事は、子どもだけを取り上げるなら、一生懸命向き合ってやることで、大抵は繋がることができる。

初対面の宿直勤務だったとしても、一緒に食事をして、TVを見ながら、リラックストークをしていれば、和んでくる子が大半だった。

しかしその家族を絡めた展開になると、難しいこと山積みだった。加えて、目の前の十五歳は、十年経ったら二十五歳になっている。その時はもう立派な大人だし、子供を産んでいてもおかしくない。

そんな十年後(わずか十年しかないのだ。成人までなら、五年ぽっきり)になるように、今自分たちの打つ手が、熟慮を重ねているかどうか、いつも気になった。

先のことなど誰にも分からないなどと、他人の人生だからといい加減なことが言いたくなかった。「気楽なセンセやなぁと思ってたけど、良かったわ!」と、もし十年後に再会することがあったら、言ってもらいたいと願っていた。

だから京都児童相談所相談判定課長として、受けた相談の目標達成率予測はいつも100%だった。ケースバイケースじゃない、全部だ!と思っていた。



6/16 SAT 京都府保母会北丹支部研修会で話をするために峰山に行った。昔、六年ほどこの管内で仕事をしていたので、僕を知ってくれている人もいて、楽しく話げできた。帰路は北近畿タンゴ鉄道という第三セクターの会社になって走り始めた、特急丹後エクスプローラーに乗った。途中からとなりの席に、とても礼儀正しいお婆さんが乗ってきた。少し言葉を交わしただけだったが、僕もつきちんとした態度で対応したりした。

礼儀正しいのはとても気持ちのいいことだし、相手への影響力も大きいものと思った。中学生達の乱暴さや無礼さは、教師や親との相互作用だなやっぱり…、と思った。

これはそうなんだろうと思う。加えて、「コントロールされる」という学習も、生き物には大切だ。しつけなしの犬より、しつけられた犬の方が、飼い主や周囲の人から可愛がられるし、長生きすると思う。

ペットを生ゴミのように廃棄する日本人の心性と底通している子育ての現状がある。飼い主を鍛えることで、捨てられて殺されてしまうペットは減る。

まったく相似形のことが子育て現場で起きているのだろう。

6/20 WED 久しぶりに家族の初回面接だった。家庭裁判所から送られてきている家族なので、来所の動機が一般のものとは少し違う。どうジョイニングして、継続面接に持って行くかが鍵なわけで、久しぶりに緊張していた。

夜は宿直で先週からいる中3女兒。夜中の1時半頃まで、むかし出会ったいろいろな子供達との話をした。

この家族面接は思い出しても顔がほころ

ぶくらい楽しく運んだ。当然、出だしはストレスフルだったのだが、母親がなかなか胡散臭い人だったので、きれい事は早々と撤収できたからだ。

裁判所からの兄相長送致だという締め付けを強調し、安易な対応は許しませんという態度を崩さなかったら、向こうが譲歩してきて、きっちりした継続面接になった。

非行少年の弟と賢明な兄が、自由に生きて来た母親の下で育っていた。良い子よりも、困った子に強くシンパシーを感じている母に会ったことは、今までなかったように思う。

おとなしく良い子は片隅に追いやられ、罔々しい子が、要求を振りかざして、母親との間でもアンフェアな権利を獲得していた。

6/21 THU 会議の結果、彼女は教護院で中卒後の進路に向けて再スタートすることになった。

いろいろと経過があった子だが、教護院（現在は児童自立支援施設）退所後、企業内高校に進学し、就職して結婚もし、お母さんになったと聞いた。

6/23 SAT 「大阪からだとところの出会いの会」10周年と松井洋子さんの「癒しのワークショップ」出版記念のパーティ。久しぶりにワークのエッセンスに触れて心動き胸熱くなる。

松井洋子さんの「大阪からころ」に毎月のように通っていたのは、この更に数年前だった。「ことばがひらかれるとき」の著者、竹内敏晴さんのポディーワークsに遭遇し、松井さんに会って、目から鱗の体験連発でのめり込んでいった。当時、京都府北部在住だったので、週末は家族放ったらかしで大阪に足繁く通った。

この日のパーティで出会った、「音具」というものを熱く語る非常に興味深かった音楽プロデューサーの事は、拙著「ヒトクセある心理臨床家の作り方」（金剛出版）に書いた。

精神、こころを語る人も、一度は「体」のテーマにしっかり向き合っておくことが大切だ。用心しないと「こころ」が口先言葉でカバーしてしまえる、まやかしの術になってしまう。それを知らないまま大きな壁にぶつかり、反動で身体一辺倒の論者に引きずり込まれてしまう。オウム真理教事件の時、そんな人たちの姿を見る気がして心が騒いだ。

身体はごまかしにくい。誰かの目の前で、まっすぐ立っているだけで、見透かされる自分もある。説明を許されず、他者の目にさらされる自分を覚悟する経験は、知的作業に偏りがちな心理職には良い経験だ。それに、身体実感を伴った言葉もまた、専門業界用語とは随分違ったものだ。

もっとも、身体は身体で又、胡散臭いところたっぷりの世界でもあるから、何事にも用心深く、のめり込まないことだ。

